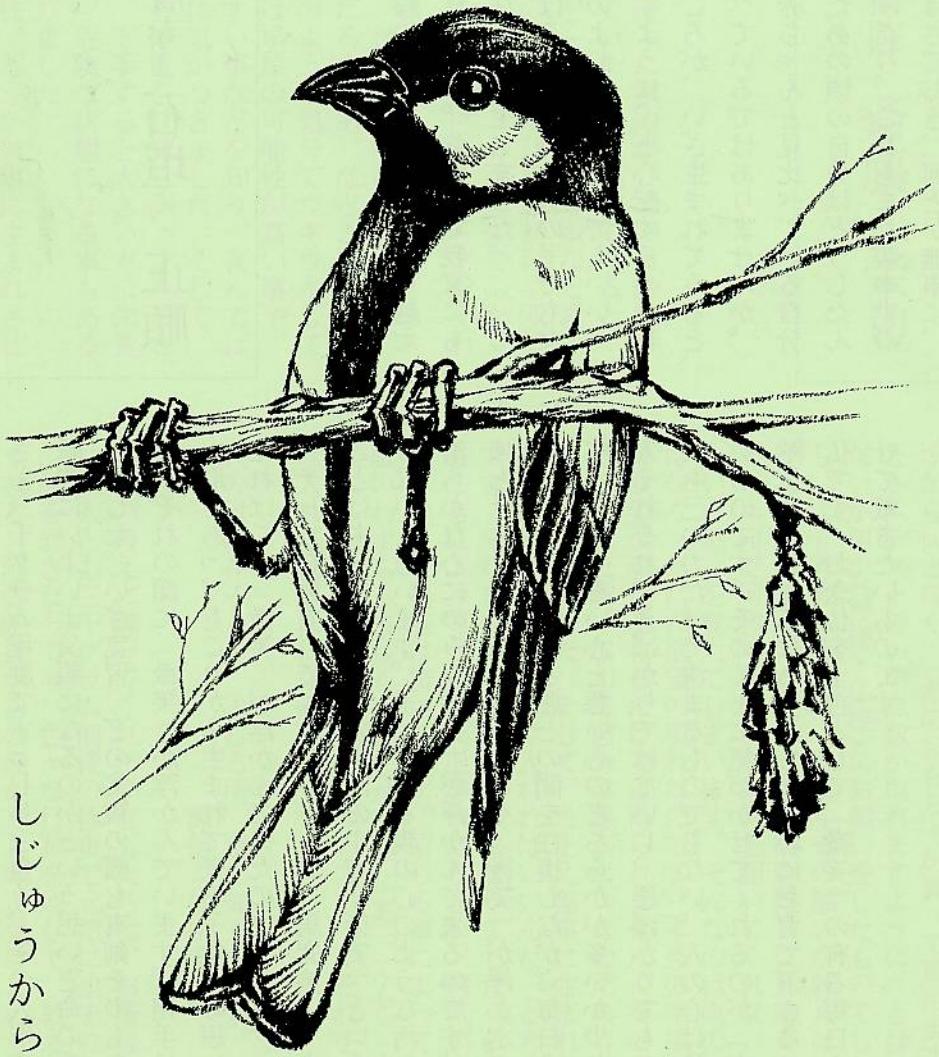
第13号　　平成7年12月1日

みおしえ

小さな命のおかげさま



しじゅうから

埼玉教区浄土宗青年会

微笑

深廣寺　石垣　正順

庭のもみじの木も今年の記録的な暑さを何とか乗り越え紅葉の準備をしているように見えます。お蔭様で我家にも小さくて元気なもみじのような手が誕生しました。

五体満足で生まれてくれればそれでいい。男の子でも女の子でも、顔のよしあし、頭のよしあしどちらでもいい、何とか無事で生まれてくれますように、と心配するのも親の世の習いかと思います。ところが、いざ生まれてみると、ついつい隣の赤ちゃんと見比べているではありませんか。我ながら喜んでみたり、隣の赤ちゃんと見比べている自分に、何とか無事にと思っていたあの頃の自分はどうしたんだ「あーあ」とがっかりしてみたり。これもまた親の世の習いかと思ってみたり。それはさておき、何とか無事に、と心配している最中、家内と一緒に母親学級なるものに行って参りました。当日の母親学級の講義は「沐浴指導と実習」でした。保健婦さんより沐浴について講義の後、人形を使っての実習です。それは本当によくできた人形で重さも三千グラム程度でずっしりと重く、その人形を抱いた瞬間にいよいよ父親になるのかという思いと命の重さを感じました。いざ実習、どの父親の顔も真剣そのものですが、それぞれの顔に「微笑」が浮かんでいます。相手はただの人形であってもこれから生まれて来る子供への思いがあったればこそ「微笑」が浮かんで来たのでしょう。

テレビを見ていて「大笑い」とか「馬鹿笑い」と言ったことはあっても、毎日の生活の中で「微笑」ということは少ないと思います。子に対する親の心のような汚れのない清らかな心にのみ「微笑」が浮かんで来るのです。まさにほとけさまそのものの心にこそ「微笑」が浮かぶのです。

私たちの心は善と悪との間を往復しながら毎日を暮らしています。善い心と悪い心のどちらかが多いか少ないかは人それぞれ、善ばかりではないし、悪ばかりでもない。それも己の力だけで決まるものでもない。人の心は移ろい易いものです。そのことに気づかせてくれるのが「南無阿弥陀仏」のお念仏なら、清らかな心にお育て下さるのもお念仏です。お念仏を土台として「微笑」の有る毎日を過ごさせて戴きたいものです。

池の水　人のこころに　似たりけり
　にごりすむこと　さためなければ

おかげさま

正樹院　斎藤　栄規

妊娠七カ月の定期検診から帰った家内が、その日に限っていつもと様子がすこし違っていました。聞いてみると、「どうも二人いるらしい」とのこと。普通の妊娠だと思っていたのですが、双子だったのです。今は妊娠初期で双子などの多胎児が判断できるそうですが、お腹の中で〔かくれんぼ〕でもしていたのか、七カ月目にしてようやくわかったのでした。

さあ、それからが大変です。はじめは、めずらしいし、同じ服を着せたらさぞ可愛いだろうなあ、などと想いを巡らし、宝くじでも当たったかのような気分でウキウキしていましたが、多胎児というのは早産の可能性が高い事や、母体が妊娠中毒症にかかりやすい事などを知り、喜んでばかりもいられない、という事に気がつきました。そして、妊娠八カ月頃、超音波で身長や体重を計算し測ってみると、二人は少し大きさに差があり、下手すると大きい方に栄養が偏って、小さい方が育たず、危険な状態になる事もある、と言われ、いっそう不安になりました。

そんな時、思わず「阿弥陀様、どうか無事に生まれさせて下さい」とお願いしながらお念仏を称えていたのです。

その事を、ある先輩のご住職に話すと、「そんな念仏は浄土宗の念仏ではないし、仏教でもないよ」と諭され、何か大きなハンマーで頭を叩かれたような強い衝撃を覚えました。神様・仏様はなんでもできるすごい人(?)で、小さい頃から何となく、「あのおもちゃが買って貰えますように」とか「テストでいい点数が取れますように」と目には見えないが何か(神様・仏様)にお願いをしたものでした。しかし、よく考えてみると、うまくその願いが叶えばいいけれども、叶わなかったとき、もし阿弥陀様にお願いをしていたら「何で阿弥陀様は私の願いを聞いてくれないんだ！」という怒りを覚えてしまいます。そんなのは真の信仰心ではなく、ただの欲望の現れなのです。本当の幸福というのは欲望が満たされるだけでは得られません。その事に気がつかされた時、なんて自分は愚かだったのだろう、と反省の念で一杯でした。そして、たとえ無事に生まれなくても、あるがままの現実を受け入れればいいんだ、と考える事ができ、それまでの不安が少し楽になりました。仏教を信じることによって、成績が上がったりとか、病気が治ったりといったご利益は無いのです。信じる事によって、明日を思いわずらう事無く、どんな不幸にあっても、「南無阿弥陀仏」とお念仏が自然に口について出て、それを素直に受け入れられる様になるのです。

人の世に在るとき、求むる所、意(こころ)の如くならず。

源信『往生要集』

仏の教えに導いてくれた子どもたちは、お蔭様で、臨月に二人とも三千グラム前後の体重で元気に生まれました。二歳を過ぎた今でも、色々な行動を通して、教えに導いてくれる、阿弥陀様からの授かりものと受けとめ、感謝のお念仏を称えさせていただいております。

往　生（おうじょう）

往生というと「大雪で列車が立往生した」とか「デパートが混雑していて往生した」などと使われています。『広辞苑』では「死ぬこと、あきらめること」や「どうにもしようのないようになること」の意の他に、仏教語として「極楽浄土に生まれる」の意が紹介されています。

往生とは本来文字どおり「浄土に往き生まれる」という意味ですが、転じて前述のような意味で使われるようになり、一般的にはむしろその方が多いようです。

簡単に説明すると、仏様のいらっしゃる仏国（浄土）を志すということです。つまり、仏教を信仰する人が、死んで生まれ変わる世界へ旅立つことを意味し、浄土宗でいえば、阿弥陀仏の本願を信じて、彼の仏の国土である西方極楽浄土へ往き生まれることなのです。

ですから、今日のように「困りきった時に閉口」した意で使う言葉でなかったということを知っておく必要があると思います。

編集後記

▼今号は、石垣・斎藤両上人のお気持を反映して、あたたかな明るさに満ちた、親しみやすい『みおしえ』となった。両上人には、この場をかりて、厚くお礼を申し上げたい。

▼私自身も、長男誕生の際に、期待や喜びと同時に、怖れや不安という相反する複雑な思いを体験した。父親となってはじめて、ただそこにいるだけの言葉を話さない赤子が、実に多くのことを教えてくれ、赤子の成長とともに、親もまた成長していくことを学んだ。子は宝という。まさに、ほとけ様からの預りものである。だからこそ、同じ天の下、はかなく消えていく小さな命の決して少なくないことを忘れてはならないと切に思う。

〒三三五
埼玉県戸田市中町二―四―十一　常福寺中
『みおしえ』編集室代表　渡辺　昭彦